

みち 道

作者：東山魁夷
生没年：1908-1999
制作年：1950
サイズ：134.4×102.2cm
ジャンル：日本画
素材・技法：絹本彩色
所蔵：東京国立近代美術館



どこまでも続く草原の道。目の前をまっすぐに伸び、丘の向こうまで続いていく道。見る人が、自分の人生を思わず重ねてしまうような道です。

東山魁夷が、青森県八戸市の種差（たねさし）海岸の風景をスケッチしたのは、戦前のことでした。戦後、そのスケッチから灯台や放牧馬などをすべて省き、道ひとつに構図を絞って描いたのがこの作品です。画家自身この絵について、「遍歴の果てでもあり、また新しく始まる道でもあり、絶望と希望を織りまぜてはるかに続く一筋の道であった—遠くの丘の上の空をすこし明るくして、遠くの道がやや右上りに画面の外に消えていくようにすることによって、これから歩もうとする道という感じが強くなった」と語っています。実際の風景から取材しながらも、心象風景とすることに成功しています。

よく見るためのヒント

自分がこの道に立っていると想像してみよう。道の先には何があるだろう。振り返ると何が見えるだろう。

みんなの感想

「カードでは灰色に見えた道だけど、いろんな色が混じっている」（小六）「意外に上り坂だと思う」（中一）

キーワードの理由

図画工作キーワード

色

単純に見えますが、よく見ると何層にも複雑に重ねられた色が見えてきます。

構図

地平線を高く取り、道そのものを大きく描いています。

遠近

消失点からさらに右側に続いていく道をかすかに描くことで、画面に広がりを作っています。

風景

風景画家として認められるきっかけとなった一枚です。

象徴

道は、誰にとっても人生の象徴であり、自分を重ねやすい題材です。

日本

-

他教科へのひろがりキーワード

自然

青森県の種差海岸に取材していますが、細部を整理したことで、固有の地域ではなく、誰にとっても懐かしい田舎の風景のように映ります。

郷土

青森県の種差海岸に取材していますが、細部を整理したことで、固有の地域ではなく、誰にとっても懐かしい田舎の風景のように映ります。

時代

戦後、さまざまなものを失った作者の再起をかけた作品です。

アイデンティティ

道は、誰にとっても人生の象徴であり、自分を重ねやすい題材です。